

奥宮慥齋日記——明治時代の部(十)——

島 善 高

解題

本稿には、奥宮慥齋日記のうち、明治九年一月一日から同年十一月二十四日までを翻刻した。架蔵番号は次の通りである。

○「日録、明治八年九年日記、明治八年一月〜九年十一月二十

四日」(高知市民図書館「奥宮文庫」、受入番号七一五七)

数年前から胃腸を患っていた慥齋は、明治九年になると愈々病状が悪化、病臥し勝ちで欠勤することも多くなった。

けれども他方で、湯島麒麟祥院で行なわれている今北洪川の提唱には熱心に参加し、且つ参禅した。そもそも禅は、生死脱得のための修行であって、病弱の慥齋は真剣であったからである。慥齋が一月二十一日条で

六十路より盡せしのりの思ひ出ハ けふ九重に君を見る哉

と詠んでいるのは、禅修行によってある程度の手応えを感じた証拠である。

ところが禅は、人情を涓滴も施さない。一月八日条に「午後赴湯島金剛経會、呈所解、洪川肯之、夜又赴参禅、呈所解、未適、十二時帰」とあるように、一つの見解が透っても、次には更に難透難解の公案が待っている。禅の公案はそう易々とは透るものではない。慥齋は幕末以来、数多くの読書によって境涯も相当に進んでいたとは言うものの、今北洪川に従って参禅を始めたのは、明治八年のことであって、まだ日は浅い。故に慥齋の禅的境涯はまだ初歩的段階であって、九月二十九日条の「病中偶所得」である次の両句

今そしるよはりはて、ハ残り蚊の すふにも堪えぬ命なりとは
(欄外) 死ハおし、死なて其ま、在経むと 思へと死ねハすへな

かりける

そして九月三十日条の

千代もかと且思ふ哉有経てし 老の命の限有身をも
は、生の一方に偏した句である。同日の句

生死ハ夜とひるとの理りと 悟り兒せしことそ悔しき

は、そういう慥齋の境涯を正直に表白したものに他ならない。

ただし、今北洪川は、慥齋を高く評価しており、度々慥齋宅を訪問している。十月二十日には、箱根で発見されたという「夢窓国師山居碑」を慥齋に見せているが、この碑文は、夢窓国師の閑居跡を記念するために、天龍寺の鉄舟徳濟禪師が建てた記念碑であつて、山岡鉄舟が明治九年八月、皇后に供奉して箱根の宮下温泉に行った際に、偶然、山中で発見したものである。この当時、山岡鉄舟もまた今北洪川に参禅をしていたので、鉄舟は洪川に文章起草を依頼し、その碑陰にこれを刻して再建した（「鉄舟居士言行一斑」「鉄舟居士の真面目」五九頁、拙稿「山岡鉄舟と禅について」「照屋佳男先生古稀記念、比較文化の可能性」二二六頁以下参照）。

慥齋は、今北洪川に参禅する傍ら、少ない時で二三人、普通は五六人、多い時には二三十人の門弟に、『莊子』、『伝習録』、『大学』、『神代紀』、『論語』、『中庸』などを講義していた。そのうち、中江・広田の二人が最も長じていたと言っている。中江とは言うまでもなく中江兆民のことであり、広田とは、慥齋日記に度々登場する「弘田」のことで、おそらく後に高知県議会議長となった弘田正郎のことであろう。

以上の他、明治九年度の日記で注目すべきことは、慥齋が加藤弘

之、西村茂樹、中村敬宇らの名を書き留めていることである。とりわけ中村敬宇とは度々会っているが、残念ながら会談内容は詳らかではない。また慥齋は、この年、いくつかの著作も行ない、その草稿も残されているが、詳細な検討は今後の課題である。

〔明治九年一月〕

明治九年丙子

一月大

一日、霜霽暖和、朝告官謝拝賀、午後拉弟及弘瀬生、探梅于向島、處々郊行最適意、半日渡橋場帰、日晡飯酒

車馬街々去又来、迎新賀客幾徘徊、閑人亦有閑公事、先向東郊拜

野梅 途中所得

夜家人等皆行田内、カルタヲ取、兼井一宿

二日、微陰、寒無事、出書潮江、午前和暖、試筆

馬車人力各朝正 吾亦屠蘇共弟兄 醉後楼上放眼界 宛然富岳笑相

迎 次弟韵

三方にけさ載て見むふしの山

携家人等聴劇音於浅草夜帰、飯岡村楼、静伯母来宿

寺子屋のいろは散ぬる身代も 忠孝の道を語りそむらむ

三日、晴、無事、隣家及湯島等へ賀新二往ク、皆不在、帰途過田

内、小憩ス、雜書ヲ借来讀、終日閑無事、日本紀私講草稿ヲ改刪、

夜無事、南方ニ火アリ

四日、晴、寒、告疾於官、濱田男磨来訪、云欲借六圓、中江生来賀、暫時話辞去、晚与弟及田内生散步本郷邊、帰途会澄川氏半々

社、々中皆集、例論古器物、午後十時辞帰、大醉、借麗氣記

五日、晴、朝介石来話、移刻、濱田生来、貸金五圓七十錢、但五円

壹分利除去、元金六円十七日返弁之筈、午後他出、長崎書信アリ

十二月廿六
日出、平安

六日、陰、寒、終日擁炉不出、浅川生来、付畫記、夜訪洪川老師、

臘八演舌アリ、会者居士八九人、村越翁亦会、門生二三生、有婦人

二人、午後九時帰

七日、晴、出省、無事、借来聖教鑑略、夜到湯島禪院臘八式、三更

後帰、明日今二日休暇

八日、晴、休暇、無事、河口来、午後赴湯島金剛經會、呈所解、洪

川肯之、夜又赴參禪、呈所解、未適、十二時帰

九日、晴、朝訪蒲生弘、托弟事、往宍戸大輔賀新、午後赴湯島聴碧

崑、夜參、十二時過帰、々遇雨、渾身沾濡、寄付金千疋於麟祥寺

十日、曉大雪、告疾、午後二時頃冒雪赴湯島、聴碧崑、直參、到夜

十二時踏雪帰、寒威最烈々、見一衲子坐雪中、出書崎陽

十一日、猶雪、泄利二三行、以故不赴聴講、擁炉坐過、腹微痛、夜

静女赴湯島、十二字帰

十二日、新霽、擁衾看雪、夜參禪於湯島

十三日、晴、猶在蓐、午後參禪於湯島、徹夜、午後三時歸臥、是日有省

十四日、晴、養痾、終日不出、講莊田内高橋來、夜九時弟婦

十五日、晴、出省、無事、午後到延遠閣、觀本邦工作產物、往來皆人力、是日書拙詠

新年望山

明て見る年の初の鏡山 うつろふ老の影もはつかし

午後四時命車帰、夜田内來、見示近製詩歌、記歌一首

白雪の降る、去年の夢さめて ふしの高ねの色を見るかな

十六日、晴、昨夜來稍暖、弟訪岩崎氏

心本体ハ如何ナル者 報四一号 原鶴巢

洋説ニハ其原天主能造者ニ皈、仏説ニハ万物体ハ天人ノ造ニ非ス、原体本有ニシテ因縁聚散生滅ノ相ヲ視スト談ス、死老ノ如キハ其始終ヲ詳ニセス、唯自然天命ニ皈ス

十七日、晴、出省、無事、草各國教法表、稟月給七十円、皆銀貨也、六円濱田分返弁受取、夜無事、是日小川弘測高橋保造江書信ヲ出ス

十八日、微陰、出省、無事、与神原精二密談教法、歸後、擁衾看書、禮弟婦云、招欽岩崎氏、被托学校事

十九日、晴、告疾、擁衾看書、晚講莊子、高橋田内宗麟等來、夜弟等聽劇音

念日、晴、得崎陽本月十二日信書、即作報、今日無事、東澄川生謝今日半々社會欠席

客 念一日、陰、寒、朝赴湯島両忘社、聽碧巖提唱、午後被命餘饗諸禪

六十路より盡せしりの思ひ出ハ けふ九重に君を見る哉

右洪川和尚拜禮歌

夜聚首説情話

念二日、微陰、出省、無事、草外教事、夜会講大學問、書生田内高橋龜甲等來聽、九時半散

念三、暎雪、欲出省下利二三行、即告官養病、擁衾談話、午後作雨、晚講傳習録、田内一人外來也、夜雨雪歇

廿四日、雪霽、猶養痾在蓐

廿五日、陰、寒、出省、無事、講莊聽者凡五六人

廿六日、暁来寒雨讓雪、奇寒徹骨、家人等觀劇於濱街、余從途中返、擁炉看書、雨雪霏々

廿七日、大風、雪、畏寒擁炉、告疾臥終日、雪積殆至尺餘、看詩集、排悶

廿八日、雪、新霽、午後拉弟觀雪於上野池辺、帰途訪田内未退食、例ノ放吟数首、今録一二

大雪に埋みや果てし間近なる 上野之鐘の音も聞えず
世二うとく住習ひてし我なれハ 雪見二こよといふ人もなし
水の上に浮てた、よふ雪みれハ 神世のむかし覚ほゆるかな

晚傳習録講、高橋田内等來會、夜無事

廿九日、微雪、禮弟出学、余頃日養痾不出、晚招飲齋藤安道、燭見跋、夫妻共帰、阿鶴亦來、是日春餅

卅日、新霽、無事、晚講莊、夜齋藤來、小飲

卅一日、晴、無事、宮崎生來、乞交換五十五円、乃任其意、稟收銀貨五十五円封置

（明治九年二月）

二月、小二十八日

一日、微雨、朝赴湯島開筵式、聽臨濟録唱提、午後説教、凡三座聽衆殆百人餘、日晡會散帰

むかしより雪の積りしにて作るふしの山 消し後に低くハやハ有なるらん

二日、陰、寒、持疾変腰痛、起居不自由、夜講大学問、聽者高橋川尻田内等也、三十圓濱田男丸より礎ニ受取、高五十圓之内拂也

三日、晴、静ヲ齋藤江遣ス、田内家借ニ付三十八圓時貸ス、十二月

廿二日 信敬雜記第三号洪川へ戻ス、壊裂魔綱論、少講義、花苑円雅

四日、晴、無事、横田〔以下欠〕

五日、晴、養痾在瘳、晚諸生來、講莊、夜無事

六日、晴、休暇、朝押山医生來按摩、齋藤芳信來訪、見示近稿一冊、鞠町四丁平川丁拾一番本山茂任來訪、小梅村十四番地佐藤焜亦來、被囑事、山口人長松某滋野幸丞等元老院人、依頼松岡時敏求漢学人

七日、雨終日、午後冒雨赴湯島碧崑會、是日禮弟月給三十円約定

八日、新霽、出省、無事、晚講傳習録

九日、晴、出省、無事、夜講大學問

十日、晴、出省

十一日、晴、紀元節不出、午前拉弟長女散策墨堤、返神学要旨於大橋正燾、訪佐藤焜於小梅村十四番地、終日逍遙、殆困憊、日晡歸、喫鰻飯

十二日、出省、無事、得崎陽正治兄書信

十三日、雨雪、出省、弟訪尾崎生

十四日、新霽、告疾

十五日、晴、晚赴湯島說教

十六日、晴、休暇、聽堀大講義五十音說於女教院、亦逍遙淺草辺、今日洪川老師來訪、適不在、殘懷不可言

十七日、晴、出省、受取月給七十圓、皆金貨

十八日、晴、出省、遣健吉於北洲舎、談高橋保造金圓事

十九日、雨雪霏々、出省、出宅調伺、作与兄収書付郵便、今日小川氏伴來、金圓二十五圓返濟、取納、返齋藤氏詩卷、晚火于島原

廿日、寒、出省、無事

廿一日、晴、寒威甚、赴湯島兩忘社聽碧崑、邂逅山岡鐵舟先生、乞畫即畫骸骨一個、無学和尚題其側

廿二日、微陰、寒、出省、無事、歸途過小倉衛門介於千葉辺尋、子夜被命駕歸

廿三日、雪、地上纔如印八卦□告疾、擁炉看書

廿四日、養痾、不出

廿五日、新霽、出省、明後日約訪洋学家、講莊、会者四五人、尤難解章也

廿六日、休暇、朝冒雨赴湯島、休講、午後又赴休業遂迂路步池畔、泥濘不可步、夜無事

廿七日、朝無事、草私講三四葉、午後訪西小川町壹丁壹番地西周先生暫話、被惠心理学一本、帰途訪南甲賀町尾崎忠治、不在、買大惠普説、廣田生來宿、夜草稿

鶯の初音もらせりするかなる ふしの麓の藪かけにして

廿八日、微陰、告官不出、健吉司法省ヨリ御用有之明廿九日午前第九時当省江出頭可致之事卜申來

廿九日、陰寒、出省、無事、夜宿直与吉住頼武、々々写書終夜不寐、亦可謂勤矣、余則參看諸新聞

(明治九年三月)

三月一日、寒威、朝退宜無事、大館龍眠來、南邸被贈松魚節、蓋過日之謝云、午後与弟及宮崎生聽劇音於兩國橋下、夜長女婦、齋藤氏潔所婦二人來、予為講和光同塵教一章

二日、夜來微雨

三日

四日

五日、晴、午前九時黒田公使婦自朝鮮、因掲國旗、訪魯教尼勿來、

會祈禱聽説教、晚講莊三三人、禮弟有内務省徵命、明後七日午前十時云、家人等（以下欠）

六日、早起、拉家人觀劇於中島座、夜帰、微雨

七日、晴、出省、御巫清直拜命御雇、入編纂掛

八日、雨、出省、無事、晚講傳習録、得長崎三月三日信書

九日、微陰、寒、感冒告官、夜會

十日、新霽、猶在蓐

十一日、晴、風埃、朝拉弟及児、訪北代忠臣於築地備前橋、暫話被命飲、帰途觀博物館、又飯松田樓、帰宅五時、適意々々、費人力式

朱二百、四百二十文、松田十八錢五リン

上二番丁
四十一番 加藤弘之

十二日、晴、早起、家人等皆往梅田村正鐵靈神社祭奠、余等留守、夜無事、夜谷生來話

十三日、晴、出省、無事、西村茂樹築地

十四日、夜来風雨、午後忽放霽、告官不出、風邪再感、夜會

識人

十五日、新霽、出省、無事、晚講莊

十七日、出省、早退、聽碧崑、是日觀大慧禪師肉筆、晚又拉弟再觀之、宍戸大輔返來調書

十六日、朝拉弟婿及弘瀨生、觀梅花於杵川、途

花のころ

醉しれて小蝶と共に舞遊ふ 現ハ夢か花の世の中

十八日、冒雨出省、無事、晚講傳習録、聽七人、宇田義房來、話写書事、夜雨蕭々、曉四時前火南方

いさ子とも花の吹雪をかきつめて 雪まろけてワれも遊はむ
花の雲雪のけしきと降かはる 都の空の定めなきかな

この頃ハ野へも市路もおしなへて 人の山なす花盛哉
田舎人來ても見よかし吾妻路ニ かく開けたる春の盛りを

十九日、雨風、是日為訪中村敬宇告官、老山畫家遊支那四五年、大有所悟、因作畫、又喜探奇山水、因有一種墨色發明、云墨畫勝着色畫、信州松本産

西東花見てめくる小車ハ 人の力をかりてなりけり

舟人も花の吹雪ニ迷ふらむ 棹さしなつみ漂二けり
咲ハ雲散れハ雪とそ見るものハ さくらの外に花なかりけり

二十日、新霽、告用出於官、午後訪中村敬宇於小石川隆慶橋下、不在、托教法調其子

傘さ、は雨にも花ハ見るへきをを はれ行今日をいかて過さむ
武士の太刀よ刀とひしめきし むかし忍の岡の花見む

二十一日、休暇、自朝至麟祥精舎、聽碧崑、終日閑遊、午後訪尾崎忠治於駿臺、已出軻、買梁詩正書

訪村越鐵善本末于柳島、贈松魚節三、直辭、抵天満宮、觀臥龍梅、遇
太田堅等、又北行抵杵川、觀村越氏梅園、満開唯如雪、忽似入香世
界

廿二日、出省、無事、弁理大臣黒田清隆復命、因御禮祭神殿、賜休暇、朝九時比ヨリ觀劇於淺草、与弟夜歸亦一適也

呼起す人幾人ぞ 臥龍梅

呼起す人もなしとや梅の花 幾代の春か臥て咲らむ

二十三日、『印二入

纔隔江村遠市塵、香風吹送羅浮春、吟節東道無知己、唯識梅花不

廿四日、晴、出省、無事、晚散步

廿五、晴、暖甚、出省、無事

廿六日、陰、休暇、不出、草神代紀注解

廿七日、雨、是日使健吉訪中村敬宇先生、午後聽碧崑於湯島、夜講
大學、夜大雨

閱湖海新報第一号 九年三月

宇内大勢を論ス 社説

清政府兵備整頓ノ話評

國家ノ大事ハ外交ト理財ニ在論

投書并評

三月八日二十圓弘田兼次江宛来、即届、廿八日也、使謙之

廿八日、新霽、出省

英人諺曰

クインウイクトリヤノ領地ニ於テハ未嘗有太陽(マヤ)之没、又日英國ノ
版図ニ於テハ曉鼓ノ声相傳ヘテ全地球ヲ一周スト

官出禁刀令

廿九日、晴、暖甚、朝腹痛下利、因告官、午後拉家人輩散上野花
下、邊池畔至湯島、訪洪川和尚、晚帰、是日東台桜花始発、得一首

いつも世ニハおくる、老か身も れ勝る ことしハ花に魁をせり
谷生宮崎生来話、夜更

三十日、晴、出省

三十一日、出省

(明治九年四月)

四月一日、晴、今日ヨリ土曜日午後半日休暇、高橋生来、共ニ弁慶
橋南畔池田屋ニ至ル、村越社中皆在、村越先生兄弟余ニ副教師ヲ命
セント云、辞スレトモ不可、既ニ入其社、不得辞、例ノ修行生徒四
人ヲ圍繞シテ唱拔声徹倉外、夜宿ス、福田氏止宿

二日、朝稍陰、在池田屋、修行人ヲ視、内暮体裁ヲ知ラン事ヲ要
ス、午牌辞去、直チニ湯島碧崑会ニ赴ク、晚大學講義、早寝、是日
日曜日休暇

三日、晴、神武天皇祭日、休暇、掲祝旗、朝九時前拉禮弟弘瀬生為
春遊、繞谷中本村、訪井上竹逸觀書畫幅、多明清人書畫、就中適意
者

費隱和尚 三十匁

担齋 三分二朱

明道畫像 三円

陸江村山水 十圓

七賢 王閩州 五円

蔣靄山本 大幅 廿五円

心越 十半 一円一方

惣計 七幅粗約

經日暮里抵道灌、經過田甫遂到飛鳥山、花滿開、遊人亦稍來觀、投

山下旗亭酒飯二十錢
二百文

又去探瀧川、幽邃可愛、夫ヨリ往田間過麦小畑、書仕□、留守川尻

生來話、昨日□□□山□□□

遊春時節氣揚々、士女滿城人欲狂、處々公園花不斷、東台看了又

西岡

右和禮弟韻

昔我すかもの里の春霞 かすかに残花の面影

是日水戸邸假山ヲ諸人ニ鑑覽せしムト云

四日、陰、寒、雨霏々、出省、無事、明五日約御用書、晚講莊、例

ノ諸生三四輩、夜齋藤氏來宿

五日、寒、曉起、看書、訪中村敬宇於礫川、小話辞去

六日、曉火、徒街巷町戸数二十九延焼、午前第四時三十分至六時

消、朝出省、無事、托写草稿

七日、微陰、出省、無事、晚講傳習録、夜雨蕭々

八日、晴、半日休暇、無事

九日、暖、休暇、午後拉弟經東台到湯島、聽碧崑了、又觀花於墨陀堤上、命小車漫步堤上、渡橋端過淺草入蕎麦店一酌、醉步帰家已夜、諸生來講大學、是日得吟數首

花歌の中ニ

散れハ又あとより咲て白雲の 上野ハいつも花盛也

十日、微陰、出省、無事

十一日、出省、無事

十二日、晴、暖、出省、使書生竹逸氏、求書畫幅、凡四幅

十三日、晴、訪英人マクロド於新橋惣十郎町廿一番地越前屋逆旅、不在、迂路於愛宕山下帰、佐々木議官來、被托賀歌、正治信書來、本月七日発也、皆無事

十四日、晴、出省、無事

十五日、晴、出省、今日省中五六員巡回拜命、半日休暇、往湯島聽

説教、風埃満街、不可歩

十六日、朝、聴碧崑録、両忘社会社中、凡八九人、物集生亦来会、日晡帰

十七日、出省、稟月給

十八日、告官、訪中村敬宇、有客暫話辞去、風埃満街

十九日、晴、出省、風埃、晚講神代紀、聴者凡八九人、夜八時過潮江家族来自國、云本月十三日朝出船、十四日達大坂、十六日又乗船、今日達横濱、六時汽車云、団欒情話

故郷のむかしの夢を今更に 見るこゝちする今日の楽しさ

二十日、風埃、出省、無事、又与島田生分科宗旨門派等統計事

二十一日、晴、寒、出省、無事、晚歩東台公園

汝もさハ花のねくらをあらそひて いさハと帰る夕鴉かな

廿二日、晴、出省、半日休暇、東堀真五郎返著述、又稟拙稿、拉潮

江女兒散策浅草、夜雨

廿三日、雨終日、午後趨湯島碧崑會、晚帰

廿四日、新霽、出省、無事、明後廿六日ヨリ朝八時出、晚二時退ト云、閱評論新聞、有記者獄中詩歌ト、一ツ

有花々々春又春 々日已過不識春 獄裏生花々常有 胸中蓄得十分春

欲厭東風廿四番 寒葩早已返芳魂 霜辛雪苦無窮恨 付与生宵月一痕

休言時事与心乖 天以自由賦我儕 又是楚囚一快事 獄窓捫虱話齋諧

一片精神本自由 身逢縲紲不知愁 鐵窓高枕悠然睡 夢落深川弟幾樓

今更よせとハそりやとふ欲な 文迷怪化にや誰かした

心一を主さへ知れハとんな苦勞もいとやせぬ
花の開くる時節か来ても 鳴て出られぬ籠の鳥

讀めハ書け書けハしやへれと育た親が 今更よせとは氣かしれぬ
禁獄なんとハ屁の屁の屁でも 便器掃除か氣にかかる

お前ハ黄金つくそりや上の空 わたしハ義理つく命かけ

廿五日、晴、出省

廿六日、微陰、從今日辰出未退、臨濟寺来談、尾崎女史来聴論語、

欲行不果、得晴湖書畫

廿七日、陰、曉起小坐、寒冷甚、出省、無事、晚佐々木高行招飲、萱堂八十賀筵也、旧縣土族皆萃、凡二十人餘、团欒飲娛、頗盡興、大婦人出席、老健也、詩歌書畫、諸方顯官人皆聚、凡八九十葉、夜更辭婦、詩歌二首及諸人詩歌ヲ贈る

(欄外) 武士の八十字治川にあけし名の 栄もしなき母そはのかけ

廿八日、陰、寒、感冒告官、返湖海新報於上村氏、有英雄事業論社説、能写不平家胸中

廿九日、晴、養痾不出、晚散步浅草近辺、半休暇土曜日

三十日、日曜休暇、午後遊両国橋辺、觀大道店古書畫幅、聴錦大夫劇音、夜無事、臨濟寺来、被借傳燈録及龍門夜話諸宗該系図

(明治九年五月)

五月分

一日、晴、出省、草七宗概略、晚宿直与長井光景、無事

二日、晴、朝宿引、休暇、午後訪竹逸不在、付半圓於其家人、又觀古書畫幅、晚四時講莊及神代紀、聴者多矣

三日、晴、出省、無事、天台赤松教正二遇談ス、晚退食

四日、雨、冒雨出省、從今日別局与島田蕃根對床、校高僧傳、亦省中一適也、晚婦、無事、弘田生来、貸金四圓、云今月念日比返弁、終夜大雨滂沱、腰痛

五日、雨不歇、告官養痾、東隣野村ニ不幸アリ、米人タラツヘル云、國家ノ制度ハ地形氣候ノ異ナルニ從テ各々其宜ヲ殊ニセサルヲ得ス曙新聞四月廿九日七百六十七号

文讀と人てらひして世の中に あらはるゝのミ國の為か□

十八才、しげ子河村氏女

開行学の道ニ皆人の 心の約の進むをを見る

右ゑい子十才十月、千葉農松本氏女

春の野に日々□□□□めらん この日本の長き日かけに

六日、雨、養痾、不出、健吉宿直ヨリ帰ル、昨五日野村生婦省二江口へ産着ヲ頼ム、夜雨

七日、雨、未歇、朝東隣野村氏葬送、健吉行、十一時比本省宿直青木浩蔵ヨリ東来、云当直ナレハ可出ト、雖不可解輿疾直出、則七日休暇、宿直ナリ、無事終、看書排遣ス、夜雨歇、半夜腹痛、轉展不能寢、乃看書曉稍眠

八日、新晴、朝命車帰、車中腹覚微痛、帰宅則稍痛、服熊胆少許有効、是日聖上及皇后觀上野公園、士女雜沓、午前無其事云、延期明

日云

題しらす

やよ烏鶉の真似をして濁る、な 黒きハ同し姿なれとも

九日、晴、午前十時幸上野公園、午後二時還幸、余拝函簿、医石田某受鍼

十日、雨、無事、養痾、不出、晚講莊及神代紀

十一日、新霽、午後一時訪竹逸於谷中本村、借来王閩州七賢図

十二日、晴、出省、無事、午後二時前帰、買神鏡臺、明十三日先考及亡妻忌祭也

いつしかに古葉しくれて白雲の 上野の花ハみとりしニけり

十三日、晴、是日祖宗靈祭、附我先考及亡妻、々々十年正当忌也、齋藤安通田内逸雄来助祭、々具借坂田氏、晚祭畢直会、夜饗應児孫等、蓋十一時過矣、醉甚、眠不知

十四日、晴、好天氣、拉弟姪散步浅草、過蕎麦店、又抵両国橋下、聽劇音、日晡帰

十五日、晴、出省、無事、小暑、晚退省

十六日、晴、出省、無事、米國教法律例原書并訳書拉帰

十七日、晴、出省、無事、稟月給、夜腹微痛

十八日、晴、受鍼療、健吉耳痛引、遣使中村敬宇、晚島田濟東云、明十九日午後退省、伴同族國治者来訪、是日終日風埃滿街、殆不可行、夜九時火、後又火、凡三度皆早消、風不歇

十九日、微陰、雨終日、挾風最豪、是日約同族國治来、因雨歇、来会省中、島田濟介之

廿日、新霽、寒、出省、無事、半休暇、午後赴湯島、聽碧崑提唱

廿一日、晴、風埃、朝赴湯島、終日醉倒有興、夜柳原火アリ

廿二日、風埃、出省、令浄写外教略表

廿三日、晴、出省、從今日湯島撰心始ル、田内夫婦豚児等皆赴

廿四日、晴、出省、晚退食、無事

廿五日、陰、告官養痾、晚聽講湯島

廿六日、陰、早起、靜坐、得崎陽信書、本月十九日發、平安

四日、微陰、与兄弟家族觀劇於本郷春木、終日有興

廿七日、晴、無事、未出、午後赴湯島碧崑、同姓國次返來系譜

五日、美日晴、爽氣可掬、早起、出省、晚傳習録会、聽者高橋等數人耳、宗麟來、惠寒具

廿八日、晴、麦寒、午後赴湯島、迂路於上野公園、晚無事、夜大雨雷鳴

六日、晴、早起、出省、無事、外教概表写了校正、晚莊子及神代紀、聽者五六名、夜醉臥

廿九日、新霽、出省、報長崎信書

七日、夜來雨徹曉、出省

三十日、出省、無事、九時半觀韓人往外務省

三十一日、陰、出省、拜花頂宮葬送式、別有記

八日、晴、告疾、不出、是日薰子内親王薨、因停音樂三日、趨淺草芳町鍼治、二丁目二十一番地大隅筆店側小路也

〔明治九年六月〕

九日、猶在蓐、晚趣湯島

六月

一日、微陰、早起、出省、退後与島田南村、訪伊達自得於両国一ノ

十日、晴、出省、半日休暇

橋六番地、暫話、予先辭帰、夜無事

二日、晴、早起、九時前拜御幸於上野坂下、十一時過御馬車供奉數十人、拜見人如山

十一日、夜來雨、晚新霽、拉婦女兒欲觀劇於本郷、到則因停止休業、乃轉路、詣神田明神婦、午後趣碧崑会、遭山口人草刈卓者愉快人也、夜無事

三日、出省、半日休暇、島田南村來訪、命飲、半日閑談、借与居士

十二日、陰、出省、無事、晚講傳習録、聽者四五名、夜無事

傳

十三日、早起、出省、讀湖海新報第九号、有感

論日本滅亡有徵效十二條^奉

第一條、兩党破裂西郷副島等辞去

二、近衛兵恣解、高歡言ヲ引

三、明治七（年號）一月十四日喰違刺大臣、佐賀暴動

四、征台遂征清国葛藤

五、樺太

六、八年五月讒謗律、新聞條例

七、激徒就縛幾十人

八、地租改正青森和歌山一揆

九、朝野新聞沢田直温禁獄一年、投書人草間時福ハ禁獄二月十円、

新聞條例筆者以從論ノ明文に違フ、又箕作の國政轉變論ヲ万国叢話

ヨリ抜抄シ、加評ノ科関氏猶罪セラル、筆者箕作ハ不与監刑

十、海關稅條約改正ノ期ヲ過己ニ幾年、今ニ着手セス云々

十一、琉球支那不承知、森氏婦朝ハ無形物ニ帰シ、曖昧間ニ処ント

十二、貨幣流通梗塞、目下空竭亮淫ハ六千巡查不能制之、投水窮民

楠本氏不能禁

十三、華士族遊民租稅ノ幾分ヲ坐食ス云々

本書十二條トス、今算スレハ十三也

又暴政不勝天理論アリ、畧ス、作者ハ清元新内ト云、嚴刑酷罰買自

由權利ノ代價也云々

十四日、晴、出省、午後一時過退、訪湯島聽碧崑

十五日、晴、出省

十六日、晴、休、薰子内親王葬式、拜路傍、午後散步兩國

十七日、晴、出省、受月給、半休、訪河口貸松方建言、借新聞、帰

途訪松欲訥

十八日、微陰、早起、赴湯島、終日雅興、草刈卓來談

十九日、微陰、出省、夜大風雨、參禪

廿日、新霽、出省、自碓陽電信、本日午前八時（宛脱カ）同十一時着、金円一

件也、夜無事

廿一日、晴、付金三十圓於郵便船東京丸、贈碓陽、曉腹痛下、告官

廿二日、養痾在蓐

廿三日、雨、無事

廿四日、陰、早拉兒輩觀劇

廿五日、晴、無事

五日、雨、出省

廿六日、雨、出省、無事、省中會議、來月二日傳習録講

六日、新霽、出省、無事、退食、豚兒婦自崎、云客月卅日發崎、神戶二泊、午前一時達橫濱、十一時歸郷、団欒情話、家人比聚首一堂、可喜々々

廿七日、晴、寒甚、出省、晚講莊神

廿八日、曉起、靜坐、告官養痾、寒疝微痛

七日、出省、無事

廿九日、微陰、午後乞鍼於淺草茅町不在、訪坂田鐵安及齋藤通安、勿々辭去

八日、雨、出省

三十日、夜來雨蕭々

九日、雨、出省

(明治九年七月)

十日、出省、是日會議結収、先日殘會、神即人、起立三十四人

七月

十一日、晴、暑甚

一日、陰、出省、無事、云廿九日行本省會議、半休暇

十二日、晴、田内逸雄婦省松山、朝七時半出發、趣湯島碧崑會、晚川尻生來

二日、雨、午後霽、拉弟聽伯田大坂新聞、晚婦

十三日、晴、無事、明日欲遊日光、拮据勿々、因告官、宮川某來、与委任状

三日、雨、出省、午後一時會議、会者十一等已上凡三十七人、余為韓事、大澤為副、至午後五時四十分會散、是夜宿直、永井某長

四日、雨、宿明、休

十四日、晴、早發下谷、宮崎生來、駕小車、与弟同車、抵千住小

憩、到粕壁換車、宿栗橋

十五日、發栗橋渡刀川、自古河賃車行々松間、直如砥、宿宇都宮
駅、晚散步駅中、投手塚逆旅、夜微雨

十六日、晴、早發宇都宮賃車行、晚到日光、投鉢石小西逆旅、晚詣
神殿、廟宇壯麗可驚駭、夜早寢

十七日、早發、著草鞋登山、坂路甚峻、觀華嚴瀑、遇一奇人、負琴
畫者、云越中人、号李角、抵中禪寺、飯一樓休憩良久、晚達湯元投
板屋某、浴温泉、下利数行

十八日、陰、冷氣襲人、各襲衣、頻浴温泉

十九日、晴、早起、又浴、日高發湯元、又過中禪寺、賃馬行、下坂
棄馬、自馬返又乘行、晚達日光街小西逆旅、日未晡、乃發此、命車
宿今市

廿日、晴、暑甚、早發、各賃小車、到野木野渡乘船、日已暮矣、終
夜降刀川、有詩示弟

廿一日、晴、日午達新川換舟、午飯旅店、又乘小舟、達深川扇橋上
陸、賃小車、歸家既未牌

廿二日、晴、暑甚、休暇

廿三日、晴、朝趨碧富

廿四日、晴、無事、出省、告歸京

廿五日、晴、無事

廿六日、晴、早起、趨碧富會、暑甚

廿七日、晴、無事、返神代直說初卷於本省、本山茂任見訪

廿八日、晴、無事、鈴木權大丞返來拙著神代說、下婢乙女暇下

廿九日、晴、無事、朝豚兒往女教院、有乙女投身事、夜齋藤來

卅日、暑甚、午後訪竹逸老人於谷中、云移居於上野山上、歸路訪之
不在、途中暑如火

卅一日、晴、風埃、高山氏寓病院、嫁伯母來訪、又淺草妹來會、夜
彈絃遣悶

（明治九年八月）

八月

一日、晴、無事、暑甚、豚兒明日發船、延期九日云

二日、無事

三日、晴、無事

四日、晴

五日、晴、夜觀烟火於兩國橋下、士女雜沓、暑亦甚

六日、晴、無事、趣碧眼會、暑甚、不出、草大學問直訳、遣悶

七日、晴、無事

八日、晴、無事、暑甚、晚稍陰、不雨

九日、晴、豚兒往崎陽、朝九時發、拮据匆忙、命小車、發軔、晚微雨点々、忽晴、訪小中村同僚、夜無事、及寒暖計九十九度

十日、晴、無事、暑倍昨日、欲雨不雨、夜稍涼

十一日、晴、今日初出省、々中無事、田内逸雄歸自松山、云二日出

鄉、滯神戸四日逆風、夜無事

十二日、晴、出省、無事

十三日、暑、倍昨、出省、無事

十四日、晴、出省、得豚兒本月十一日書、云該晚泊神戸

十五日、晴、朝霧

十六日、晴、暑、暴腹痛、因告官

十七日、暑上九十八度、出省、稟月給、無事

十八日、晴、暑、殆昇百度、出省、無事

十九日、朝陰、午晴、出省、暑甚、仲徒町已乏水云、夜散步池畔

廿日、晴、夕陰、休暇、無事、怕暑不出、夜六時後雷雨一霎、人々蘇息、終夜雷鳴、雨亦随之、夜分爽氣、可掬

廿一日、朝早涼、可掬、出省、徒步到省、今日發會、講莊及傳習録

廿二日、晴、欲出疝痛發、告官、服熊胆即歇、尔後腹尚瘳弯、晚乞
鍼、草論語解訳、遣悶、坐夜耿耿不寐、点燈讀書

（明治九年九月）

九月分

一日、出省、無事、晚講莊及傳習

廿三日、晴、早起、受鍼治、夜暴瀉七八行、服宝丹

二日、出省、無事、夜雨一過

廿四日、晴、猶瀉下不已、蓐上養痾、得豚兒崎陽十六日書、云十三

日午後六時着、平安、晚医生来受診、無事、夜不下利安寝、夕驟雨

一掃、斎藤来宿

三日、晴、休暇、赴碧崑會、是日午後弘田生等来、約演説品行論、
因請講余大学、余以適宜許之

廿五日、朝爽氣、可掬、裁書報尾崎及豚兒、午後二時講論語、聽者

八九名、有講録別具、夜無事

四日、晴、出省、晚講莊及傳習録

外神田ノ斎藤某来、田内応接ス、
山本丁六番地、田肆ノ叔父上云々

五日、晴、出省、下利数行

廿六日、晴、出省、無事、日光行詩草成、晚講、兒女輩講古文

六日、晴、告官養痾、瀉下数行、看書遣悶

廿七日、出省

七日、晴、無事、瀉下未歇、延医診之乞藥

廿八日、晴、欲出又腹痛、告官休、晚莊子及傳習録講義

八日、晴、無事

廿九日、晴、風、養痾

九日、晴、無事、養痾在蓐、晚驟雨輕雷、夜涼、可掬

三十日、晴、午雨、七百年御忌六條院天皇式年祭賜告、与弟觀劇於本郷

十日、晴、朝爽氣襲人、欲赴湯島碧崑會、弟輩帰遇途、云休會、晚

三十一日、晴、稍冷、出省

弘田生講品行論、書生十四五人来會、其後予講大学問、夜拉姪輩觀

写繪

十一日、夜来雨、朝晴、出省、無事、從此日九時出三時退、退食後講莊傳、聴者八九人、夜無事、早寢

十二日、夜来有雨、滌然、無事、夜亦雨

十三日、晴、出省

十四日、出省、微恙、早退、得兒崎陽書信、八日發云

十五日、夜来有風雨、養痾在蓐、晚講論庸、夜大雨滂沱

十六日、終日雨蕭然、告官養痾、草講録、遣悶、晚小中村氏見訪、

送致月給報長崎書信

十七日、風雨終日、朝衝雨赴碧崑會、早辞帰、々途風雨、命車、々

中衣裳皆濡

世の中ハかくこそ有けれども さわきし人か降々といふ

十八日、晴、出省、無事、与島田南村談往事

十九日、晴、出省、無事、布山岡本家人等来東京

廿日、夜来雨蕭然、冒雨出省、無事

廿一日、陰、感冒、告官、熱頭痛岑々、晚延医柳下容齋診、云頃来流行、宜注意、是日終日臥蓐、不看書、夜不能寢頭痛

廿二日、秋陰暗澹、在蓐看書、附祺鍼西岡生来云、手脚冷則不可出血、千谷生等来訪疾

廿三日、秋雨蕭々矣、聊蓐上看書、排遣

廿四日、稍晴、覺甚快

廿五日、晴、風、午前九時惡寒戰栗甚、至十時熱甚、及午後四時稍輕也、迎近方医師皆不在、入夜多田弟子来診、十時前山川友益来診、云所謂泥沼熱之最恶性也、變癘可、然必不可變、乃投劑□下劑一帖、十二時過可服、終夜熱未歇、然到午前一時後微覺弛、少間就寢

廿六日、朝下利二行、遣人迎医、午後四時山川医官来診、云熱稍減、服幾那塩、頻將冷水氷等灌頭腦、惡寒少減、夜半又服幾那、終夜不快寢、柳下亦来診、是日嘔吐一度

廿七日、早朝山川医官来診、云疾勢既退半、然皆幾那藥力也、不可

怠、舌苔因固結、食氣絶無□諸菓亦無味有嘔氣、夜山川弟子来

廿八日、雨、朝行灌腸瀉下二行、然未下燥屎、終日荏苒

（欄外）午後服幾那

小中村来訪、午前九時山川医官来診、晚稍平穩

廿九日、雨、是日覺微快、初与人応接、門生故旧多来訪、晚神原精

二亦来訪、展覧畫幅為慰、夜耽々不寐、展轉呻吟達曉

病中偶所得

今そしるよりはりはて、ハ残り蚊の すふにも堪えぬ命なりとは

（欄外）死ハおし、死なて其ま、在経むと 思へと死ねハすへなかりける

三十日、寒雨蕭々、比昨覺不甚快、行灌腸水瀉一行、午飯喫香魚、有少味

生死ハ夜とひるとの理りと 悟り兒せしことそ悔しき

千代もかと且思ふ哉有経てし 老の命の限有身をも

（明治九年十月）

十月分

一日、晴、朝弘田宮崎生等来訪、午前八時後乍発痛、疲憊不能忍耐、悩苦不可言、服熊胆猶不癒、請山川医官、自昨宿直不至、午後不能診投鎮痛諸剂、皆無驗、弘田生急走共慣塾、請塾生佐野某^{兩館}、

熊胆半囊来、即服一二箋、痛勢未全弛、而覺稍易按排、午後二時至

十分弱、不覺睡眠、寤則痛如拭、始似解囚縛、三時後山川医官来

診、云所謂心瘧痛耳、蓋因驟寒所發也、不足慮、不及別投剂、乃

去、夜十一時前電信来自神戸、云フ、ネツカウアリヒヤウセイ、カ

ンヲマツ、則遣報ヨホトヨシ

（欄外）夜半又発痛、服熊胆即癒

二日、秋陰、昨痛之餘残果作熱、至午後四時不醒、諸生皆来、弘田

中尾千谷宮崎中等也、医是日不来、夜稍寐、人道今宵是中秋

三日、秋霽、爽然、朝八時頃灌腸を行、得一矢、大如頭指、午後齋

藤来訪、三時三十分頃、三河町三丁目分出火、家数八百軒餘焼失と

云、山川医官ノ門生来診^診

梓弓身ニいたつきの入しより 名に高き夜もしらて過けり

四日、陰、朝六時過灌腸ヲ行、午後聊通ス、午後二時頃再自然通

便、浅草勝田氏来訪、^{浅草俵町五番地居住也}

教部省川口齋藤二子見訪、齋藤近日将辞職帰國、見返文衡山詩集、

晚覺胸膈否鞭、夜懊惱難眠、午後二時行灌腸、少通、終夜風甚、憶

児在船中、頗有詩思、得二三句、然不能足就一首

五日、秋陰暗澹、風颯々、午前九時自然通滑、便小行、放狂吟遣

興、固不足録、午後四時児正治帰自崎陽、云三日午後四時発神戸

名護、本日午前十一時横濱泊、午後二時卅七分汽車達停車所云々、
 山川医官遂不来、夜分自然通、燥矢三行、快寢
 泥沼熱マラリヤ、近年流行台
 征以後殊ニ多シト云

六日、爽晴、朝灌腸後滑便四五片、激覚快、始登楼上眺庭樹、小
 憩、疲甚、便帰臥、午後三時後山川医来診、云稍向癒可喜、長女
 亦受診、予自明日換葉健胃強壯、弘田生来訪、出崎陽郵箇、夜宮崎
 生来話、今夜稍快寢、午前二時小水

七日、罕晴、六時初寤、喫香魚、豚兒適蒲生談事、心地稍快乞藥山
 川医官、換強壯健胃劑兼用丸劑、午後二時頃又灌腸、通滑便、喰鱸
 魚、稍有味、豚兒買来支那シヤホ一顆頗佳口、午後第三時報傳信機
 于崎陽裁判所、凡二十字、是日兒詣司法省、小中村来訪、云土持昨
 日出頭、僧傳課中稍閑、欲整頓云々、夜婿齋藤来宿、命飲談話、是
 夜快寢、午前三時寤、五時後又眠

八日、罕晴、晏起、朝自然快通二三片、是日休暇、健吉赶来々社
 會、々者三十三人、中江廣田二生為之長、議論侃々衆皆噤口、午後
 二時又通滑便、腹大空闊、健兒買来小鯛、鮮美甚適口、二時後傳信
 来自崎陽、云本省有指令不及来、本日十時発、晚山本安太郎来訪、
 云近日帰縣因暫話旧、亦足慰病魔、偶弟亦来話、移咎辞去、夜齋藤
 来、今夜快寢徹曉、從今日服強壯健胃劑、又鮓雞肉ゲレ一四五錢

九日、晴、至曉初寤、燈下讀高青邱詩、排遣、又讀墨林今話句讀、
 改過日詩

想汝玄灘又遠洋 通宵懷我九回腸 可憐老病如織命 空繫電機信
 一場

午後三時本山茂任来話、惠蒲葛、晚無事、秋陰暗澹、是日告官欲養
 病、夜蒲生来訪、夜無事

十日、晴、無事、午前十一時後正治有本省命、便出頭、云再可之
 崎、拜命、晚深尾末長弘田等来話、日晡健吉借来五岳杏雨畫幅、校
 本氏亜細事情、書翰、夜無事、雨蕭々、快寢

十一日、雨、兒再適長崎、午前十一時命小車発東京、戲送別

力士因金且讓功 官人為法又西東 暫時小別何須惜、江戶長崎半
 月中

西東通ひ馴てはこともなく 江戶長崎も隣なりけり

終日客不来、雨蓋豪、使書生写重細亜近傍事情、夜風雨

おもひきりて遣りし物から親船の 子故にさはく波ハ立けり

代嫁清女

雨あらく風すさむ夜ハ終宵 君か船路を思ひこそやれ

また

安しとハ思ふ物から親船の 心にさはく夜ハの波風

夜行灌腸、通小片一二、舌傷少安

十二日、雨歇風静、朝托返、亟細事情於北代生、午後秋晴、是日稍快、棲居殆半日、草佛鑑稿本、遣悶、返來弟正治遣崎書、千葉貞朝西岡來

十三日、新霽、輕寒、稍向快、河口氏見訪、惠寒具、見返日光行詩稿、始往田内、觀萬葉、遣排、夜無事

十四日、罕晴、無事、洗浴手脚、剪爪、宮崎高橋二生來訪、暫話、晚無事、試小歩

十五日、朝新寒、午暄甚、負暄看雜書、從今日歇兼用丸劑、剃鬚髻、試歩田園、晚蒲生來話、夜欲稍起疝痛、即服熊胆行灌腸、乃已矣

十六日、秋晴、暖甚、午後訪弟家、試歩、阿鶴等買物於南街、河口氏折簡返書箱、借方人絕句、本山茂任來示王鐸書幀適勁可喜

十七日、晴、児信書來、云十二日晚發橫濱、十三日達神戶、十四日晚發神戶、午後拉弘瀨生試歩上野山下繞池畔、歸疲甚、便小眠

十八日、陰、女教院大祭児輩皆往、昨奉獻金壹圓生魚二尾、余亦往觀、逢小雨婦、閱臨濟錄有省

十九日、大霧起、咫尺不辨、折簡問試歩文例於本省、神原精二來訪、弘田生亦來、問文章法、夜雨蕭然

二十日、稍霽、出試歩請於本省、即見允許、午後洪川和尚見訪、云一昨晚歸自鎌倉、見惠寒具、又被示函嶺夢函國師山居地碑銘、云山岡鐵舟檢書、題曰夢函國師山居地、銘四言、一字磨滅不可讀、並有享保丙：題詩、古色鬱然、蓋亦有數焉存者、晚試歩街頭

廿一日、晴、無事、午後深尾生來訪、又中澤七等判事來訪、暫話、晚宮崎生來、長坐到夜

廿二日、晴美日、岩崎惟謙來訪、命飲、午後与散步上野、疲甚、歸臥

廿三日、微陰、朝命車至山川医官、午後二時發疝痛、甚劇、諸藥無効、至夜不癒、押山氏來鍼、猶不已、冷汗如雨、終夜苦悶、不得一睡、至曉少睡、覺稍有間、夜吐午餐少許

廿四日、雨、山川弟子後藤某來診、腹猶痛、貼熱粥蒸劑、本省伴來、返下野国誌十二并圖、中臣祓蒙訓四祭祀編二、夜無事、微痛、服熊肝即已

廿五日、新霽、無事、只疲憊耳、宮崎生送金五円過上、高山氏妻

来、与嫁等散步上野公園、夜微痛

廿六日、晴、飯後微痛、午前十時後正治婦自崎陽、云本月廿日発崎、同廿二日神戸着、滞二日、到大坂、廿四日発神戸、今晚達横濱、是日朝安積医生来診、即投水丸二剂去、夜快寢

廿七日、陰、豚児出省、熊本鎮臺電信頻来、云稍就鎮撫、士族百七十名、半逮捕或自裁云々

廿八日、晴、新寒、無事、熊本電信一云、昨午前五時後、断不通、因不知怕寒、不出擁衾看書、晚聞劇音、南原禮弟齋示電報、廿七日六度云、賊徒凡二百名余、死者三十人、捕縛二十二、屠腹十七、其外脱走、縣令廿七日午前十一時死、夜火鳥越

廿九日、晴、無事、休暇、兒輩觀劇、午後赴碧崑会、夜第一時頃類鳴早鐘、可怪

三十日、晴、無事、昨夜有巨賊襲國立銀行、或云七十名、午後訪竹逸上野北、觀顏魯公帖、夜無事、午後九時又早鐘、似昨夜

三十一日、晴、贈山川医官藥料診察謝義、凡七圓八十二錢、豚児持送、晚大分縣書生井上光之外一人来、強乞金、余断然謝絶、即帰、蓋窮生之困策也、沢田生来自箱館、夜半有雨

(明治九年十一月)

十一月一日、雨蕭々、無事、終日看書排悶、不出、晚早寢

二日、新霽、無事、閱上野新聞、浴後弟来、粗話機事、本省伴来云、考證課被廢入教務課、夜早寢、至十一時不寐、剪燈看臨濟録、若有所省、得六十五年為底事、依然聽法無依人句、欣然益難眠、至曉復眠

三日、晴、天長節、余不朝、訪小中村清矩、暫話辞出、達湯島本郷、訪洪川和尚、話頗長談昨夜事、借楞嚴經五本讀之、夜剪燈又看書、

詠秋夜 鈴屋祭
宿題

はてもなく物を思ふハ中々二 ハハ秋の夜も 秋の長夜も短かりけり みさきみちこそすれ

(欄外) 無題

喰違ふ悔をもしらて徒らニ 何をいすかの嘴鳴すらむ

四日、晴、初出省、無事、午休暇、買机二脚、夜半寢、看楞嚴經、若有省

ねられぬを習とわひそ秋の夜の 長きハ老の命なりけりけり ならすや

五日、晴、休暇、午後赴碧崑会、夜聽劇音、加藤毘等来訪

六日、晴、寒、出省、午後大少至召省中、有示諭、早退食、夜聽劇音、雨

七日、雨歇、出省無事、宿直與島某、看新聞明治史要

八日、晴、寒、朝退食、午後赴碧崑会、夜無事、西國動乱稍鎮定、前原被捕

九日、晴、出省、草僧傳歷

十日、晴、早起、觀劇於島原終日、夜歸、家人皆往

十一日、晴、出省、無事、半日休暇、歸途觀通三丁寿亭書畫展覽、与豚兒俱買杖一杖、喫鶏肉、晚訪坂田先生、云明十二日發横濱之勢廟

十二日、晴、曉起讀書、赴湯島、終日遊

十三日、晴、出省、無事、開会傳狂

十四日、晴、出省、失杖

十五日、晴、出省、晚會、是日炊赤飯頒諸所、買杖

十六日、晴、出省、無事

十七日、陰、寒、出省、稟月給、夜神原氏来、命酒、談話移刻、示余詩、即次韻 精二

霎特千里信 孤客九回腸 不独電機速 病魔夢一場 夜雨

（欄外）方今國債一億五千二百萬円余

十八日、新霽、告官養痾、午後出遊、壹円式方斗費

十九日、晴、寒、与弟輩觀劇於喜昇座、朝品行会

廿日、晴、是日皇后行啓西京、午後赴湯島碧崑会

廿一日、晴、出省、宿直与荒木卓尔

廿二日、晴、朝退食、午牌拉兒女觀菊於團子坂

廿三日、晴、諏訪中村等来、午後与禮弟觀楓于瀧川遊、客多出、歸途又觀染井菊

廿四日

（以下、記載なし）